

らを「モール人」と呼びならわしていた。じつさい、かりにフランスが「アラブというネイション」の手応えを感じたとしても、実体は「フランスというネイション」とは似ても似つかぬハイブリッドな世界だったはずであり、「アラブ王国」が「不可能な王国」として立ち消えになったのは、おそらく当然の帰結だった。ただ、その過程において、アラブとヨーロッパの「二つの人種」を、宗教の独自性は温存しつつ平和共存させるという理想が、フランスの共和主義者たちによって提唱されたことは、それなりに興味深いエピソードではあった。⁽⁵⁷⁾

イデオロギーとしての人種概念

そこでふたたびセムに話をもどすなら、セム人 (Semite) とは、アラブがそうであるように、とりあえずは「人種」であって「民族」ではない。『人類の聖書』などの構造にも示唆されているように、それは「アリア文明」の優越が説かれるうちに、対となる概念の必要に迫られて、おのずと照明を浴びた名称であるのだが、だからといってこれが、にわか捏造された恣意的な範疇だということにはならない。すでに十八世紀初頭から、アラビア語、ヘブライ語、シリア語、エチオピア語の言語学的な類似が確認されており、その後エルネスト・ルナンは記念碑的な『セム諸語の一般史』(一八五五)において、「セム」という概念こそが、オリエントの歴史を解明する鍵であると主張した。

ルナンが「セム」というときに、その関心は言語的なものにとどまりはしなかった。むしろ言語の問題を包含したかたちで一神教の起源とその存在理由、さらには人類の歴史における宗教の役割までを、科学的に説き明かすことが、彼の生涯をつらぬく壮大な学問的野心だった。それが時代の要請に見合った企画だったからこそ、キリスト教の誕生を歴史的に記述した『イエス伝』は、驚異的な成功をおさめたのだった。このベストセラーのもととなったのは、一八六二年のコレージュ・ド・フランスにおける開講講義『文明史におけるセム人の寄与について』だが、ルナンはそこで「イエス、この比類なき人間」という表現を用い、このひと言が、イエスの神性を否定したのと同じく、一大スキャンダルを引き起こした。ただしこの名高い提言だけに、講義が集約されるというわけではむろんない。そこでルナンは、「セミテイスム」のもっとも明確な発現である「イスラミズム」に対し、さながら宣戦布告のような弾劾を行っていたのである。

さて皆さん、ここで未来について語るなら、わたしはそこにインド・ヨーロッパ的な精髄^{essence}の勝利をますます予感するのであります。十六世紀以来、それまでは無定型であった、ある重大な事実が、驚くべき迫力で姿を見せはじめました。それはヨーロッパの最終的な勝利です。〔…〕それまでセミテイスムは相変わらず地上の王者だった。ムスリムのオリエントは西欧を打ち負かし、よりすぐれた軍隊、よりすぐれた政治をもち、富と知識と文明を西欧に送りつづけていました。今や、役割は逆転しました。ヨーロッパの精髄^{essence}は、比類なき大きさに発展しています。イスラミズムは反対に、ゆっくりと崩壊してゆきます。今日、それは轟音を立てて崩れ落ちていきます。現在の時点において、ヨーロッパ文明が広く伝播するために欠かせぬ条件は、純粹にセム的な事柄 (chose semitique) を破壊すること、イスラミズムの神権的な権力を破壊すること、要するにイスラミズム自体を破壊することです。それというのも、イスラミズムは公的な宗教としてしか存続しえない。自由で個人的な宗教という状況におかれたとたんに、自滅してしまうにちがいありません。〔…〕イスラームとはヨーロッパの完全否定なのであります。イスラームとは狂信であります。〔…〕イスラームとは科学の蔑視であり、市民社会の抹殺であります。セム的な精神^{esprit}の恐るべき単純さのために、人間の頭脳は縮こまり、繊細な思考に対し、微妙な感情に対し、そして理性的な探求に対し閉ざされてしまい、ただ「神は神なり」という果てしなき同語反復に向き合うことになるのです。⁽⁵⁸⁾

イエスの神性を疑問視すること、イスラームの全面的な否定とが、ルナンの思想のなかで、いったいどのような

仕掛けによって、論理的な脈絡を構成することになったのか。おそらくは、ルナンの「キリスト教文明」という概念そのものが「イスラーム文明」を排除する議論を内包しているはずであり、そのことの検証が必要なのだが、これは本書の結論部分の課題としなければならない。

アリアの哲学を称揚するという点においても、ルナンはミシュレと同様、模範的な「オリエンタリスト」であり、自然ななりゆきということか、「セムティスム」という抽象的な概念のみならず、地中海の対岸に住む「アラブ」の価値を相対化することに努めている。一般に、アラブこそが哲学・科学の発展に寄与したといわれるが、もともとそれはギリシアからの借り物であり、しかも「イスラミスムに支配されたセム人の土地」ではなく、アラビア語を学問の用語として採用したペルシア、モロッコ、スペインなどで、ギリシア・アラブの科学は開花したのだというのが、ルナンの見取り図だった。

予想されるようにルナンの文明論は、ヨーロッパ中心主義的、エリート主義的なものであり、そのなかで様々の「人種」はヒエラルキーを前提とした秩序に組みこまれる。一八七一年、普仏戦争の苦い経験をふまえてフランスの国威発揚を唱えるとき、その論調は、人種の優劣を根拠とした植民地主義の全面的肯定にまで至るのである。

大まかな話として植民地化は第一級の政治的要請であります。植民地をつくらぬ国家は、決定的に社会主義への道、すなわち富める者と貧しき者との戦争への道を歩むこととなります。優れた人種が劣った人種の国を征服し、その国を支配するためにそこに留まることは、良識に反するものではありません。イギリスはこうした種類の植民地化をインドに対して実践していますが、それはインドにとって、また一般的に人類にとって大いに益であり、イギリス自身にとっても益であるのです。五世紀と六世紀におけるゲルマンによる征服は、ヨーロッパにとってあらゆる意味で自己保存と正当性の基盤となりました。対等な人種間の征服が非難すべきものであるのと同様に、劣った人種や墮落した人種を優れた人種が更生させようとするのは、人類にとって摂理といってもよい

事柄です。

ジュール・フェリーやガンベッタなど、第三共和制初期の政治家が受けつぐ植民地主義の正統的な議論の本質が、思想家のマニフェストとして、ここに凝縮されたかたちで披瀝されている。「共和国の創立者」と称えられるジュール・フェリーは、文部大臣や首相を歴任し、非宗教的な義務教育の普及に貢献する一方で、植民地拡張政策を積極的に推進した。具体的には、チュニジアの保護領化、マダガスカル(1)の植民地化、コンゴヤトンキンへの侵出によって、フランス植民地帝国の形成に尽力した共和主義陣営の頭目である。そのジュール・フェリーは、一八八五年七月二十九日の議会演説で「優れた人種は劣った人種に対して権利をもつ」と断言して反対派の野次を浴びた。それはたしかに、ジュール・フェリーの恥ずべき人種主義が露呈する一方で、植民地主義の暴走を戒める良識派が正当に反発したかのような印象を与えるエピソードではあった。

ただし、後続の言葉はこうだ——「優れた人種には権利がある、なぜなら彼らは劣った人種に対し、義務を負うからであります。彼らは劣った人種を文明化する権利をもつのです。ジュール・フェリーのイデオロギーを問うことは、当面の目標ではないのだが、「優れた人種」という形容が、次のような文脈で使われるとき、植民地主義との関係は微妙にシフトして、短絡的な思考に揺さぶりをかけるように思われる——「優れた人種の責任である教育と文明化の使命を肝に銘じた入植者は、まことに稀少であります。負けた人種をよりよきものにできると信じる者は、さらに稀少なのであります。彼らは口々に、その負けた人種は手のつけようがない、教育不可能だと語ります。〔…〕彼らは三百万の人間を前にして、抑圧的な政策しか考えつかないのです。アルジェリア植民地の現場を批判した文章からの引用である。議論の前提となるのは、ただだんに「文明化あるいは教育の使命」を実感する人間だけが「優れた人種」の名に値するという了解であり、それ以上ではない。植民地史の大家シャルル・ロベール・アジュロンは、この文例をふまえて、ジュール・フェリーの「反植民地主義」を論証する引用集を作ることとも充分可能だと、多少のア

イロニーをこめて示唆している。⁽⁶⁾

文明の概念も変容する

そこであらためて、虚心にルナンの文章を読みなおしてみよう。イギリスのインド支配につづいて、五、六世紀のゲルマンによるヨーロッパ征服が肯定されているのだが、その何気ないつながりに注目しよう。ミシュレの文明史に立ちもどるなら、太古のインドに発する「光の奔流」の先端が、ついにヨーロッパに到達した歴史的な事件が、ここでルナンが淡々と「ゲルマンによる征服」と呼ぶ出来事だった。

いずれにしてもアリアこそが、人類の最良の部分、「優れた人種」だという了解は、ミシュレとルナンに共通するものである。しかも、こうした人種概念は、ヨーロッパ内部の力関係の解析にも適用されるのであり、たとえば普仏戦争は、アリア賛歌に奇妙なバイアスのかかった生々しさを与えていた。すなわち、フランスがドイツに負けたのは、「劣った人種」であるからだという議論があり、じつのところ人種のヒエラルキーは、客観的な根拠とは無縁に構築されるフィクションの最たるものといえる。

ジュール・フェリーの周辺で流通していた典型的な植民地主義の言説は「ヨーロッパ人種かつキリスト教文明の諸国家」(les nations de race européenne et de civilisation chrétienne)に「文明化の使命」を託そうというものだった。⁽⁷⁾「ヨーロッパ人種」という単数形の範疇が想定されていること、ナポレオンには理解しがたいであろう「キリスト教文明」という自己認識がいつのまにか形成されてしまっていることに注目しておきたい。

経済学者シャルル・ジイドによれば、ラテン人種、とりわけフランス人という人種は、植民地の人民の優れた「教育者」であるという。ヨーロッパも、ラテンも、フランスも、ゲルマンも、そしてセムとアリアも、すべてが「人種」という言葉によって切り分けられ、実体化されている時代こそ、ほかならぬ植民地主義の全盛期なのである。本

書第Ⅱ部で指摘したように、十九世紀の末までは、「民族」(ethnie)という語は存在しなかったのだから、わたしたちにとって大いに違和感のある区分であっても、raceという言葉が使われる現場においては、律儀に「人種」という訳語を踏襲してゆかなければならない。アンリ・ロランズによれば、

十九世紀後半の文献に目を通してみると、文明の概念が、意味を変えてしまったような印象を受ける。世紀の前半においては、啓蒙思想の論理にならない、歴史の向かうべきところとして人間の平等を推進していたが、今や、文明の概念は、さまざまな不平等を歴史的に正当化する論理を採用しているのである。一八五〇年前後に、西欧思想のなかで、抑圧されていたものの大々的な揺り戻しが起きた。人種をめぐるイデオロギーがふたたび姿をあらわしたのである。⁽⁸⁾

ご記憶のように一八五〇年前後とは、フランスが事実上の奴隷解放を実現した時期にほかならない。新しい人種イデオロギーが、十八世紀の博物学が駆使した人種概念と異なるとしたら、その相違点は何か。啓蒙の時代の形態的な人種論は、第Ⅰ部でビュフォンを引きながら検討してみたが、そこでもすでに、アフリカの黒人や植民地の先住民が明らかに劣った人種とみなされていた。決定的に変わったのは、おそらく「文明」との関係である。いやむしろ「文明」の概念が変化したために、おのずと「人種」の概念も奇怪な変貌をとげたというべきかもしれない。

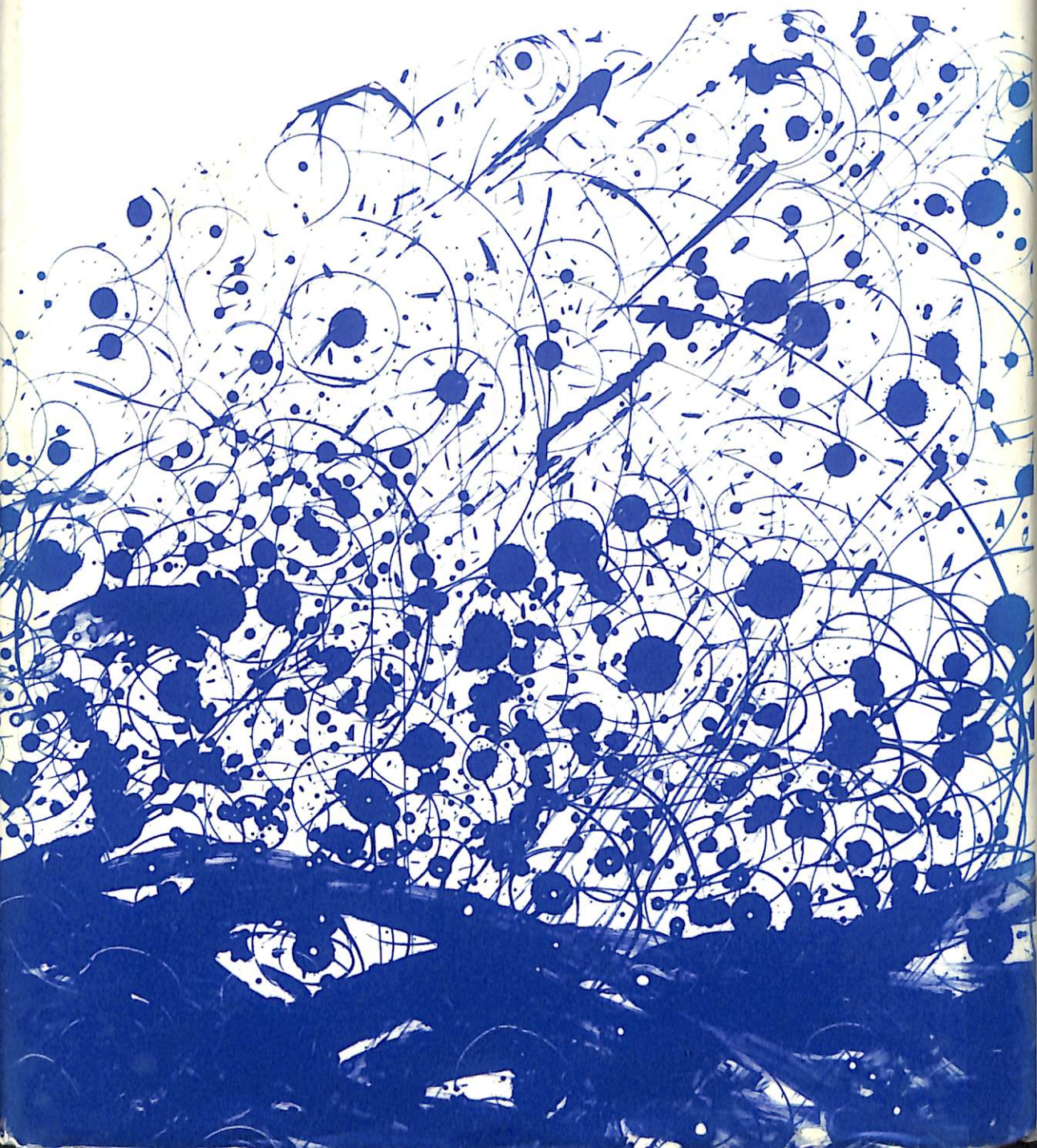
啓蒙の世紀における「文明」の概念は、いわば相対主義的な視点をかかえこんでいた。遠い植民地の島々が、ルソー、ブーガンヴィル、デイドロ、ベルナルダン・ド・サン・ピエールにとってユートピアでありえたのは、文明の不在という主題が、たんなる欠如にとどまらず、ヨーロッパ文明の自己批判を導く契機となっていたからだ。たとえ寓話的な設定であろうとも、旅行記に描かれたタヒチの先住民は、ヨーロッパ人を説得するに足る独自の世界観をもつのである。「文明」と「未開」あるいは「文明」と「野蛮」の対立が、「ヨーロッパ文明」と「オリエンタル」の対立

ヨーロッパ文明批判序説

植民地・共和国・オリエンタリズム

工藤庸子 [著]

東京大学出版会



著者略歴

1944年 浦和生まれ

1969年 東京大学文学部卒業

現在 東京大学大学院総合文化研究科教授(地域文化研究)

主要著訳書

『ブルーストからコレットへ』(中公新書, 1991年)

『小説というオブリガート——ミラン・クンデラを読む』(東京大学出版会, 1996年)

『恋愛小説のレトリック——『ボヴァリー夫人』を読む』(東京大学出版会, 1998年)

『フランス恋愛小説論』(岩波新書, 1998年)

『アジャデ』(訳・解説, ピエール・ロティ著, 新書館, 2000年)

『サロメ誕生——フローベール/ワイルド』(著訳書, 新書館, 2001年)

ヨーロッパ文明批判序説

植民地・共和国・オリエンタリズム

2003年4月25日 初版

[検印廃止]

著者 工藤 庸子

発行所 財団法人 東京大学出版会

代表者 五味文彦

113-8654 東京都文京区本郷7-3-1

電話 03-3811-8814・振替 00160-6-59964

印刷所 研究社印刷株式会社

製本所 牧製本印刷株式会社

©2003 Yoko Kudo

ISBN 4-13-010092-0 Printed in Japan

〔日本複写権センター委託出版物〕

本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。